

<目次>

序論

第1章 エル・グレコの生涯と受胎告知について

- 1節 エル・グレコの生涯
- 2節 先行研究におけるエル・グレコへの評価
- 3節 受胎告知とは

第2章 イタリア滞在期作品の考察

- 1節 モデナ、エステンセ美術館所蔵作品(1567年頃)
- 2節 プラド美術館所蔵作品(1570-72年)
- 3節 マドリード、ティッセン=ボルネミッサ美術館所蔵作品(1576年頃)
- 4節 イタリア滞在期作品のまとめ

第3章 スペイン定住後作品の考察

- 1節 ドニャ・マリア・デ・アラゴン学院附属聖堂の〈〈受胎告知〉〉(1596-1600年頃)
- 2節 イリエスカス、カリダード施療院附属教会の〈〈受胎告知〉〉(1603-05年)
- 3節 トレド、タベラ病院附属教会の〈〈受胎告知〉〉(1608年以降)
- 4節 大原美術館所蔵作品(1610年以降)
- 5節 エル・グレコの受胎告知画全体のまとめ

第4章 エル・グレコ以前の受胎告知画との比較

- 1節 受胎告知画の場の変遷
- 2節 同主題画との比較
- 3節 結論

図版リスト

参考文献

## 序論

この論文の目的は、エル・グレコによる受胎告知を主題とする絵画の表現の特徴を挙げ、その表現が用いられた意図を明らかにすることである。

エル・グレコは、16世紀の画家で、ギリシア、イタリア、スペインを活動の拠点とし、主に宗教画や肖像画を描いていた。今回、考察の対象として取りあげる受胎告知画は、エル・グレコがイタリアに滞在していた1567年から1576年と、スペイン定住後の1596年以降の、ふたつの時期に集中して制作されている。イタリア滞在期の作品とスペイン定住後を比較すると、主要人物であるマリアを中心に据えた作品構成は共通しているが、場景の描写に変化が見られる。イタリア滞在期の作品では、建築要素によって遠近感が与えられ、画面に奥行きが感じられる。それに対して、スペイン定住後の作品では、背景が雲や暗闇によって覆われた閉鎖的な空間が作られている。この様式的な変化は、エル・グレコが意図して超自然的な世界を追求した結果だと思われる。

この論文では、エル・グレコの描いた受胎告知画を年代順に記述し、聖書との比較を行い、その表現の特徴と変遷を明らかにしていく。また、中世からルネサンス期を中心とした受胎告知画全体の変遷のなかに、エル・グレコの受胎告知画を置き、エル・グレコに影響を与えた思想を探る。それに加えて、ほかの画家が描いた同主題画と比較することで、エル・グレコが特徴的な表現を用いた意図を考察していく。

## 結論

最後に、本論文で論じてきたエル・グレコの受胎告知画についての考察をまとめていく。エル・グレコの受胎告知画は、1567年から1576年のイタリア滞在期と、1596年以降のスペイン定住後のふたつの時期に集中して制作されている。エル・グレコが受胎告知画を制作していた時期は、トリエント公会議で発布されたトリエント教令の影響により、受胎告知画の場景描写が変化した時期に当てはまる。そのため、エル・グレコも少なからず、トリエント教令の影響を受けていたと考えられる。このことを念頭に置いて、エル・グレコの受胎告知画全体の特徴を見ていく。

エル・グレコの受胎告知画全体を概観すると、2つの特徴が挙げられる。まず、第一に、マリアを作品の中心に据えた作品構成である。大天使ガブリエル、聖霊の鳩、雲間から差す光の動きは、鑑賞者の視線をマリアに誘導していた。このことから、マリアが作品の中心だと考えられる。新約聖書『ルカによる福音書』の記述において、受胎告知の主要人物はマリアである。よって、マリアを中心に据えた構図は聖書に則した表現であり、トリエント教令の「教義的な誤りを犯してはならない」という項目に当てはまる。

次に、第二に、スペイン定住後の作品に描かれている超自然的场景である。エル・グレコの受胎告知画を年代順に見ていくと、イタリア滞在期の作品には、背景に建築要素が描かれている。しかし、時代が経つにつれ建築要素は排除され、スペイン時代の作品では、背景を雲や暗闇で覆うようになった。雲や暗闇によって人物の背後で閉じた空間は、観者とマリア、大天使ガブリエルの距離を近づけ、鑑賞者に目の前で受胎告知を見たような錯覚を与える。これは、トリエント教令の「信者に信仰心を起こさせるような教化的なもの」という項目に当てはまる。また、閉じられた空間のなかで、天上界と地上界が交わり受胎告知が起こるといふ、現実にはありえない超自然的场景が描かれている。この超自然的描写は、宗教の超自然性を示し、信者の信仰心を起こす効果があると思われる。

以上のことから、結論づけると、エル・グレコの受胎告知画における特徴は、マリアを中心に据えた作品構成と、雲や暗闇によって閉じた空間のなかに作られた超自然的场景である。これらの表現は、現実にはありえないことが起こるといふ宗教の超自然性を表わすことで、信者の信仰心を起こさせるようとする意図のもと描かれていたと考えられる。これが、この論文の結論である。